

中国先秦時代苑池史料集成（一）

—西周篇—

劉海宇 ※

本稿は、中国西周時代（前十一世紀から前七七一年）における苑池関係の資料を収集し、伝世文献^①に記された史料と出土文献である金文史料に分けて整理したものである。伝世文献については『中国古代造園史料集成』^②にならい、人物を項目にたてるが、金文史料については池・囿・林・陂などのように名称別に条目を定める。金文史料は難解であるので、銘文の拓本と釈文を付記するとともに、その金文に関する主要な解釈を研究者別に列記する。西周時代の苑池研究に資することを期待する。

一 伝世文献

周文王 姬昌（前十一世紀）

『詩』大雅・靈臺

經始靈臺，經之營之。庶民攻之，不日成之。經始勿亟，庶民子來。王在靈囿，麀鹿攸伏。麀鹿濯濯，白鳥鵲鵲。王在靈沼，於仞魚躍。虞業維樅，賁鼓維鏞。於論鼓鐘，於樂辟廱。於論鼓鐘，於樂辟廱。鼉鼓逢逢，矇瞍奏公。

『孟子』梁惠王上

文王以民力為臺為沼。而民歡樂之，謂其臺曰靈臺，謂其沼曰靈沼，樂其有麀鹿魚鰾。古之人與民偕樂，故能樂也。『湯誓』曰：「時日害喪？予及女偕亡。」民欲與之偕亡，雖有臺池鳥獸，豈能獨樂哉？

『竹書紀年』卷上

（帝辛）四十年周作靈台。

『淮南子』卷十二道應訓

文王歸，乃為玉門，築靈臺，相女童，擊鐘鼓，以待紂之失也。

『史記』封禪書

禮、瀉有昭明，【索隱】案：樂產引河圖云「熒惑星散為昭明」。天子辟池。【索隱】樂產云未聞。顧氏以為璧池即瀉池，所謂「華陰平舒道逢使者，持璧以遺瀉池君」，故曰璧池。今謂天子辟池，即周天子辟雍之地。故周文王都鄆，武王都瀉，既立靈台，則亦有辟雍耳。張衡亦以辟池為雍。

『史記』周本紀

（西伯）明年，伐崇侯虎。而作豐邑，【集解】徐廣曰：「豐在京兆鄆縣東，有靈臺。鎬在上林昆明北，有鎬池，去豐二十五里。皆在長安南數十里。」【正義】括地志云：「周豐宮，周文王宮也，在雍州鄆縣東三十五里。鎬在雍州西南三十二里。」自岐下而徙都豐。

『新序』卷五雜事

周文王作靈台及為池沼，掘地得死人之骨，吏以聞于文王。文王曰：「更葬之。」

『新書』卷七君道

文王有志為臺，令近境之民聞之者裹糧而至，問業而作之，日日以眾，故弗趨而疾，弗期而成，命其臺曰靈臺，命其囿曰靈囿，謂其沼曰靈沼，愛敬之至也。『詩』曰：「王在靈囿，麀鹿攸伏，麀鹿濯濯，白鳥鵲鵲，王在靈沼，於仞魚躍。」文王之澤，下被禽獸，治于魚鰾，故禽獸魚鰾攸若攸樂，而況士民乎！

周穆王 姬滿（前九七六～九二二）^③

『穆天子伝』卷三

天子賓于西王母，乃執白圭玄璧，以見西王母。好獻錦組百純，口組三百純。西王母再拜受之。□。乙丑，天子觴西王母于瑤池之上。

同書卷五

癸亥，天子乘鳥舟龍舟浮于大沼。沼，池。「龍」下有「舟」字，舟皆以龍、鳥為形制，今吳之青雀舫，此其遺制者。夏庚午，天子飲于涓上。乃遣祭父如圃鄭，用□諸侯。辛未，天子北還，釣于漸澤，食魚于桑野。丁丑，天子里圃田之路。盡規度以為苑圃地，而虞守之也。

二 金文文獻

1 辟雍か辟池

（1）麦方尊（西周早期・『集成』六〇一五）^④

王令辟井（邢）侯出坏（坏），侯于井（邢）。雩若二月，侯見于宗周，亡述（尤）。迨（會）王饗薺京，酺祀。雩若翌日，在璧（辟）雍，王乘于舟，為大豐（禮）。

王射大艸（鴻）禽，侯乘于赤旂舟，從，死咸，之日，王以侯內（入）于寢，侯易（賜）玄周（琯）

戈（後略）

郭沫若…薺京即

豐京，此與宗周相

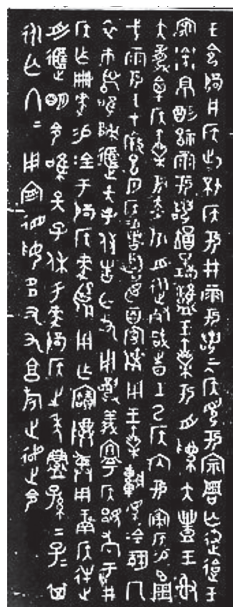
距一日，其地復有

辟雍在焉，其為文

王之舊都無疑。（『大系』^⑤，四一頁）

馬承源…辟雍，周代王家之大學。（中略）辟雍之環水，金文中亦稱大池。

（『銘文選』^⑥，四七頁。）



（2）靜簋（西周早期・『集成』四二七三）^⑦

唯六月初吉，王在薺京，

丁卯，王令靜司射學宮，小

子眾服、眾小臣、眾尸（夷）

僕學射，雩八月初吉庚寅，

王以（與）吳華、呂剛，會

斂（鹵）葢師邦君射于大

池，靜學（教）無尤，王賜

靜鞞（璫），靜敢拜稽首，

對揚天子丕（丕）顯休，用作（作）文母外姑尊簋，子子孫孫，其萬年用

馬承源…學宮，即大學，在辟雍。（中略）故此學宮在辟雍。（『銘文選』，

一一一頁。）

楊樹達…學宮者，所謂天子之大學曰辟雍者是也。（中略）史記之辟池即辟雍，亦即此銘之大池。（『金文說』^⑧，一八九～一九〇頁。）

白川靜…辟雍儀禮の一として饗射が行われてきたが，司射とはその射儀

を掌ることを言う。（中略）學宮は辟雍施設の一である。辟雍の大池は適

簋にも見え，また麦尊では射禽のことが行われている。（中略）薺京大池

における射漁は，辟雍儀禮の一として歴代行われることであり，穆王の一

代に限ることではない。（『金文通釈』卷二，一二七～一二九頁。）

（3）井鼎（西周早期或中期・『集成』二七二〇）^⑨

唯七月，王在薺京，辛卯，王漁于薺池，乎

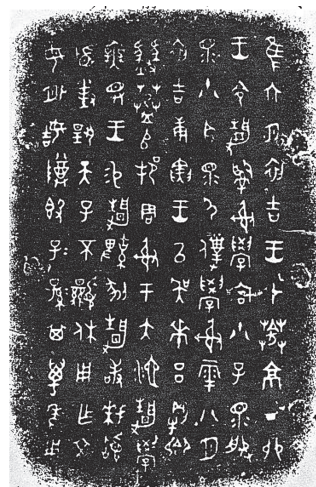
（呼）井從漁，攸賜漁（魚），對揚王休，用作

（作）寶尊鼎。

白川靜…薺京大池における漁の儀禮を記し

ているが，本器には大池の名をあげていない。

（中略）大池以外にも，漁を行う池沼があつ



たのかも知れない。(中略) 薺京の漁に従うものは、麦・適など何れも東方系の族である。(『金文通釈』巻二、一四九頁。)

(4) 公姑鬲(西周中期・『集成』七五三) ⑩

唯十有二月既生霸，子中(仲)漁薺池，天君蔑公姑曆，事(使)賜公姑魚三百，拜稽首對揚天君休，用乍(作)齋鼎。

白川靜：漁は何れも薺京において行われており、辟雍儀礼の一つであつたらしい。

本器に薺京の名を上げていないが、薺京辟雍の儀礼と見てよい。(中略) 漁に奉仕して魚を賜うのは当時の常例であつたらしく、適簋・井鼎には何れも漁して魚を賜うことを記している。天君・公姑は王后・君

婦であり、王后・君婦がこの種の儀礼に参与していたことが知られる。(『全文通釈』巻一①，八〇一～八〇二頁。)

(5) 伯唐父鼎(西周中期・『近出』三五六) ⑪

乙卯，王饗薺京。王華，辟舟臨舟龍。咸華，伯唐父告備。王各，乘辟舟，臨華白旂。用射絳、釐虎、貉、白鹿、白狼于辟池。咸華，王蔑歷，賜柅鬯一卣，貝廿朋，對揚王休，用作□公寶尊彝。

張政烺：辟舟或即鷁舟。(中略) 舟龍，古人常刻畫舟為龍形。⑬

劉雨：在銘文中，辟是辟雍之辟。(中略) 是知古代辟雍是建在環水如璧的島上，故水池稱辟池，舟行辟池中，故又稱辟舟。⑭

袁俊傑：舟龍，當是刻畫為龍形的舟。龍，亦有高大之義，如龍馬即此



義。舟龍也可能是指王所乘的大舟、龍舟。(中略) 可見，鳥舟龍即龍鳥形舟，也就是後世的青雀舫、龍舟，故本銘中的「舟龍」亦即龍舟。⑮

(6) 適簋(西周中期・『集成』四二〇七) ⑯

唯六月既生霸，穆穆王在

薺京，平漁于大池，王鄉(饗)

西(酒)，適御亡遣(饗)，穆

穆王親易適爵，適拜首(手)

稽首，敢對揚穆穆王休，用乍

(作)文考父乙尊彝，其孫孫

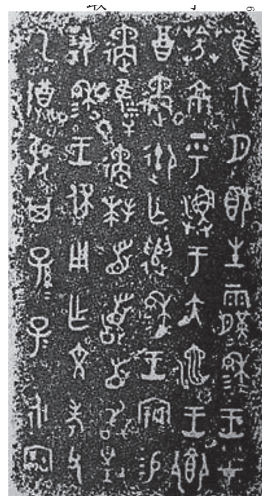
子子永寶

郭沫若：「大池」亦見『靜簋』，當即辟雍之靈沼，「麥尊」「王乘于舟為大豐」之處。(『大系』，五五頁。)

陳夢家：鎬京大池即辟雍，詳『天亡簋』、『公姑鬲』兩器考釋。在鎬京大池行饗射之禮，其事甚有關於古禮制，而祇見於西周初期和穆王時器。(中略) 由此可見周王漁於大池即漁於鎬京之辟雍，往往乘舟而射，既射即以所獲魚禽或納於寢廟、或賞錫於其從御之人，其時間則在六月、七月、八月。(中略) 此器先漁而後饗即先射而後饗，與『長由盃』先饗而後射，正好顛倒其次序。此所饗者是酒，彼所饗者是禮，此又一不同。由此知同屬穆王之時，其禮制可有不同者。此器的「適御」猶『井鼎』的「井從漁」，皆謂侍從周王往漁，亦即王漁的侍從。(『斷代』，一四四頁。)

馬承源：大池，指辟雍的環水，即靈沼。靜簋稱「王射於大池」，井鼎銘「王漁於□□」，都是王親射親漁。(中略) 此銘「呼漁于大池」，亦當是王命漁師先漁於大池。(『銘文選』，一〇五頁。)

白川靜：薺京は薺京辟雍、大池は辟雍の大池である。麥尊・靜簋にみえる。魯の泮宮にも泮水をめぐらし、水草をとって廟に供薦していたことが歌われているが、金文では魚鳥をとって供している。(『金文通釈』巻二、



一四二、一四三頁。）

(7) 老簋(西周中期・「二編」四二六)^①

唯五月初吉，王在薺京，漁于大澮。王蔑老曆，易(賜)魚百。老拜稽首，皇揚王休，用作祖日乙尊彝，其萬年，用夙夜于宗。

張光裕：蓋凡與射魚事類相涉者多集中于「薺京」，其他都邑則鮮有此類活動。此或因「薺京」擁有辟雍及大池，可供乘舟或射獵之故，(中略)「澮」實可隸作「澮」，而讀為「號」。「大澮」



倘非「大池」別稱，亦當與「大池」性質相若，為當日王室舉行射魚禮之場所。由靜簋及適簋稱述，知薺京有「大池」。(中略)無論「大池」、「大澮」、「大澤」、「大沼」、「辟雍」、「辟池」，其所在地之範圍應頗寬廣，除有水澤外，猶應有山林可供禽獸棲息，故既可於其中乘舟射魚，又可進行射獵。金文中凡稱「漁于大池」、「魚于大澮」、「射于大池」云者，要皆於周天子「射魚」之禮攸關。^⑱

李家浩：頗疑「澮」當是「池」字的異體。(中略)適簋、靜簋銘文把射魚於薺京的池稱謂「大池」。老簋銘文所射魚的「大澮」也位於薺京，「大澮」當是「大池」的異文。於此可見，把老簋銘文第二行第四字釋為「澮」，讀為「池」，是合理的。^⑲

2 囿

諫簋(西周晚期・「集成」四二八五)^②

(前略)先王既命女(汝)黜(績)嗣王宥(囿)，女(汝)某(謀)不又(有)聞(昏)，毋敢不善，今余唯或嗣(嗣)命女(汝)，賜女(汝)勒(後略)陳夢家：司宥即司囿，「周禮」「圉人掌囿游之獸禁」，「正義」云「古謂之

囿，漢謂之苑」。『說文』曰「囿，苑有垣也」，王宥即天子之苑。

『說文』曰「苑，所以養禽獸園也」，『詩·靈臺』「王在靈園」傳云「園所以域養鳥獸也」，『呂氏春秋·重己篇』注云「畜禽獸所，大曰苑，小曰園」，「一切經音義」卷十二引「三蒼」

云「養牛馬林木曰苑」。囿是田獵之所，古之「田」象四方界垣之形，籀文圖字象田中四木，此「三蒼」所謂養牛馬林木曰苑。(『斷代』，一九〇頁。)

白川靜：王宥は王囿であろう。周礼の囿人の職に当る。天子の園囿を管理する職であろう。(『金文通釈』卷三上，五七、五八頁。)

馬承源：囿，王室的遊園。(『銘文選』，二〇八頁。)

3 還敝(苑林か園林)

免簋(西周中期・「集成」

四六二六)^③

唯三月既生霸乙卯，王在周，

令(命)免乍(作)嗣土(徒)，

嗣莫(鄭)還敝(虞)，眾吳

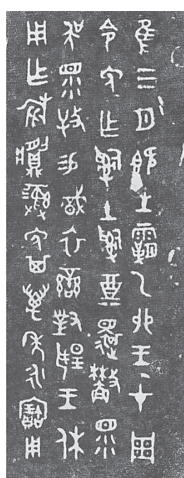
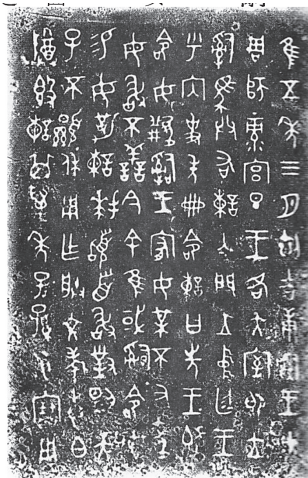
(虞)、眾牧，賜戠(織)衣、

織(鑾)，對揚王休，用乍(作)旅(簋)，免其萬年永寶用

郭沫若：還當讀為苑，敝假為林。(『大系』，九〇頁。)

郭沫若：蓋自穆王以來，在西鄭設有離宮別苑，王則時往就居也。(『大系』，九一頁。)

陳夢家：此器還林即園林或苑林。還假作園，『說文』曰「園所以樹果



也。『周禮・載師』「以場圃任園地」注云「樊圃謂之園」，是園即園。『詩・七月』「九月筑場圃」，而『周禮』「場人掌國之場圃而樹之國瓜珍異之物」，是司還即場人。還或是苑（後略）。²²（『斷代』，一一一頁）。

楊樹達：還徹二字當連讀，乃地名。余疑即咸林也。鄭康成毛詩譜鄭譜云：「初，宣王封母弟友於宗周畿內咸林之地，是為鄭桓公，今京兆鄭縣，是其都也。」咸還同聲，故銘文作還，而詩譜作咸，古人地不虛名，森林所在，則謂之林，林所在多有，則別之曰甲林乙林，咸林其一也。司鄭咸林者，其職蓋與周禮地官司徒所屬林衡之職相當。（『金文說』，一八〇頁）

馬承源：還假借作園。還與園都以袁為聲符，古音相近可通。（『銘文選』，一八〇頁。）

白川靜：鄭還是地名であろう。還を園・苑に充ててよむのはなお確かでない。（中略）鄭還とは鄭の近傍の地であろう。（中略）徹は免簋にみえる。簋では周師の司徹のことを佐助しているが、その地が広大であるため、佐助の官を必要としたのであろう。（中略）徹は廩に通じ、山叢の利を収めるといふ。林に通用し、鐘銘に徹鐘というものは、後の林鐘に当る。（『金文通釈』卷二，四六一～四六二頁。）

4 陂

微繇鼎（西周晚期・『集成』二七九〇）²³

唯王廿又三年九月，王在宗周，王令微繇翬（續）嗣九陂，繇乍（作）朕皇考繇彝尊鼎（後略）

郭沫若：陂，池也。蓋命管理川虞、澤虞之屬。（『大系』，一二四頁。）

陳夢家：壅土為障以蓄水，謂之陂，故又為池為湖。此官當為管理陂障蓄水之職，則當時農業上已有了蓄水的工程。（中略）陂與湖之別，在于一是人工利用水流障隄所成，一為天然之湖泊。（『斷代』，二八一～二八二頁。）

馬承源：陂，蓄水之池。（『銘文選』，一二四頁。）

白川靜：ここは九陂をそのままに解して、陂池を掌るものとしてよい。陂には蓄水・堤防の義があり、治水或いは水利に関する職事とみられる。陂の字形が薛氏と続古ではかなり異なっているが、確かなことはいえないが、単に地名或いは澤虞の官でないことは明らかである。またこの一事の冊命を以て、器を作っていることから、その職事が重要であったことが知られる。（『金文通釈』卷三，三〇三～三〇四頁。）

王廿又三年九月，王在宗周，王令微繇翬（續）嗣九陂，繇乍（作）朕皇考繇彝尊鼎（後略）

5 湖

散氏盤（西周晚期・『集成』一〇一七六）²⁴

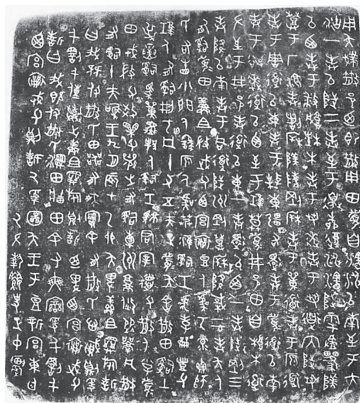
用矢戡（撲）散邑，廼即散用，

眉（壻）自瀝涉以南，至于大沽（湖），一奉（封）。（後略）

吳大澄：第二行沽當即湖之省，（中略）上言渭洮下言大湖，與漁陽塞外之沽水相距太遠，自當釋作大湖。²⁵

白川靜：沽，（中略）山陵にかかる地名である。（『金文通釈』卷三上，一九六頁。）

馬承源：大沽，亦水名。（『銘文選』，二九八頁。）



6 その他

(1) 汎

天亡簋（西周早期・『集成』四二六一）²⁶

乙亥，王又（有）大豐（禮）。王

凡三方。王祀于天室，降，天亡又

（宥）王，衣祀于王不（丕）顯考文

王，事喜（饌）上帝（後略）

聞一多：竊謂『麥尊』紀王在辟雍

乘舟為大豐，此亦言大豐，則凡疑當

讀為汎，傳王在辟雍中泛舟也。（中

略）簋文曰「王汎三方」，猶言王遍游辟雍之水矣。²⁷

陳夢家：大禮是饗射之禮，行於辟雍。（中略）古有射魚之法，而大池即辟雍，

所以漁於大池、射於大池和王乘舟為大豐而射於辟雍，應是同類之事。（中

略）辟雍指環水及環於水中的丘及其上建築，合而言之為辟雍，分而言之為

池與臺。水的部分有不同的稱謂：璧池，辟池，大池，瀉池和靈沼（靈臺）。

辟雍內水中丘上的建築，也有不同的稱謂。所謂昭明、靈臺都指池中丘上的

建築。（『斷代』，四頁。）

馬承源：大豐，即大禮。指周王在辟雍中泛舟射禽、祀於天室和饗食等禮。

『詩·大雅·靈臺』孔穎達『疏』：『韓詩』說辟雍者，天子之學……所以

教天下春射秋饗，此說饗射之禮在辟雍中舉行。（中略）辟雍中的園水稱為

大池。通簋銘云「乎漁于大池，王饗西」，靜簋銘「射于大池」，都說明辟雍

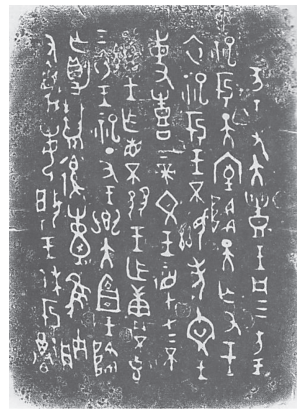
中行饗射之禮。綜上所述，大禮之儀為：一，於辟雍中舉行；二，大池中乘

舟；三，泛於三方；四，行射禮，射大鴻；五，王以酒饗從者。（中略）凡，

假為汎，與泛同。「王汎」與麥尊銘「王乘於舟」同意。（『銘文選』，一五頁）。

郭沫若：凡假為風，諷也。三方，東南北也。（『大系』，一〇二頁。）

赤塚忠：（凡字）あるいはこれを方（沝）ともいい、また甲骨卜辞にお



いても方が祭儀を意味している場合もあるが、それは四方に対する意味にとつたのである。凡は般来、招榜する意味にとり、両者は相関連するものである。（中略）要は、凡、方、沝ともに降神を本義とする祭儀である。²⁸

(2) 舟

楚簋（西周晚期・『集成』四二四六）²⁹

唯正月初吉丁亥，王各于康宮，仲卿父内（入）又（佑）楚，立中廷，

内史尹氏册命楚：赤（赤）芾，纁

（纁）旂，取適（徵）五（五）罍（罍），

鬲（鬲）（鬲）（鬲）官（館）、内師舟

（後略）

馬承源：内師，官名，内官

之長。（中略）舟，官名，司船

隻的官。舟官之名見於『禮記·

月令』季春之月：是月也，天子乃薦鞠衣於先帝，命舟牧覆舟，五覆五反。」

鄭注「舟牧，主舟之官也。覆反舟者，備傾側也。」（『銘文選』，一六二頁）。

(3) 底魚

害簋（西周晚期・『集成』四二五八、四二六〇）³⁰

（前略）官嗣尸（夷）僕、小射、底魚。（後略）

陳夢家：余謂底魚者，侍漁也，取漁之官。（中略）故底侍相通。³¹

陳夢家：此底魚之官即『左傳·襄二十五年』之「申蒯侍漁者」之侍漁。

杜預注云「侍漁，監取魚之官」，

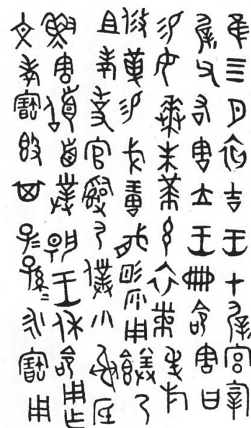
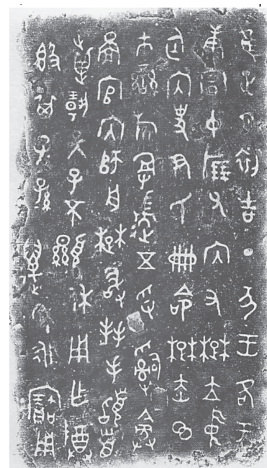
於古當為從漁之官。其職與僕、

射同列，蓋既為侍從而又司射

魚之事。但西周初，有侍漁之

人，尚未有底魚之官。（『斷代』，

一四四頁。）



- (1) 本稿に取り上げる伝世文献は前漢時代かそれ以前の文献を対象にする。
- (2) 田中淡等編『中国古代造園史料集成』、中央公論美術出版、平成十五年増補改定版。
- (3) 西周の年代学は『夏商周断代工程一九九六～二〇〇〇年階段成果報告』による。夏商周断代工程專家組編、世界圖書出版公司北京公司、二〇〇〇年版、八八頁。
- (4) 中国社会科学院考古研究所『殷周金文集成』修訂増補本、中華書局、二〇〇七年版、『集成』と略す。本稿に取り上げる銘文の隸定はみな『集成』か『近出殷周金文集録二編』による。
- (5) 郭沫若『西周金文辞大系図録考釈』、科学出版社、一九五七年版。『大系』と略す。
- (6) 馬承源主編『商周青銅器銘文選』第三卷、文物出版社、一九九〇年版。『銘文選』と略す。
- (7) 前掲書『集成』第四冊、二六〇四頁。
- (8) 楊樹達『積微居金文説』、中国科学院出版、一九五二年版。『金文説』と略す。
- (9) 前掲書『集成』第二冊、一三九七頁。
- (10) 前掲書『集成』第一冊、六九四頁。
- (11) 白川静『金文通釈』、平凡社、二〇〇四年版。
- (12) 劉雨等編著『近出殷周金文集録』第二冊、中華書局、二〇〇二年版、二二〇頁。『近出』と略す。
- (13) 張政烺『伯唐父鼎・孟賁鼎・顧銘文釈文』、『考古』一九八九年六期、合訂本五五一頁。
- (14) 劉雨『伯唐父鼎的銘文与時代』、『考古』一九九〇年八期、合訂本七四一～七四二頁。
- (15) 袁俊傑『伯唐父鼎銘通釈補証』、『文物』二〇一一年六期、三八～四三頁。
- (16) 前掲書『集成』第三冊、二四〇五頁。
- (17) 劉雨等編著『近出殷周金文集録二編』第二冊、中華書局、二〇一〇年版、九一～九二頁。『二編』と略す。
- (18) 張光裕『新見老簋銘文及其年代』、中山大学古文字研究所編『康樂集——曾憲通教授七十寿慶論文集』、中山大学出版社、二〇〇六年版、一一～二〇頁。
- (19) 李家浩『「釈老簋銘文中的遽字」』、『古文字研究』第二十七輯、中華書局、二〇〇八年、二四五～二五〇頁。
- (20) 前掲書『集成』第四冊、二六二四～二六二五頁。郭沫若是有を囿と隸定しているが、解釈は無い（『大系』、一一七頁）。
- (21) 前掲書『集成』第四冊、三〇〇二頁。郭沫若・陳夢家・馬承源はこの銘文の「鄭還林」を鄭の園林と読んでいるが、楊樹達は鄭の咸林とし、白川静は鄭還の林としている。
- (22) 陳夢家『西周銅器断代（六）』、『考古學報』一九五六年四期、一一一頁。
- (23) 前掲書『集成』第二冊、一四五七頁。
- (24) 前掲書『集成』第七冊、五四八六～五四八七頁。「大沽」を水名か地名と解したり、「大湖」と読んでいたりして、諸説ふんぶんとしているが、いくつか取り上げる。
- (25) 吳大澂『憲齋集古録』第十六冊、一九三〇年滄芬樓影印本、八頁。
- (26) 前掲書『集成』第四冊、二五八九頁。聞一多・陳夢家・馬承源は銘文の「大豊」を辟雍の儀礼と解し、「凡」字を「汎」としているが、郭沫若は「諷」と、赤塚忠は「方（𠂔）」としている。
- (27) 聞一多『聞一多全集』第一〇卷、湖北人民出版社、一九九三年版、六〇八～六〇九頁。
- (28) 赤塚忠『西周初期金文考釈』、『甲骨・金文研究』、研文社、一九八九年版、五六八～五六九頁。
- (29) 前掲書『集成』第三冊、二四六三～二四六九頁。
- (30) 前掲書『集成』第四冊、二五八四～二五八八頁。
- (31) 陳夢家『釈底漁』、『考古社刊』四期一九三六年、『金文文獻集成』第三六冊、線装書局、二〇〇五年版、三八九頁。